# まえがき

## ―新たな方言学の誕生―

### 実践方言学とは何か

現代人の言語生活において、方言は重要なキーワードと言える。社会のさまざまな場面で、方言が際立つ存在となってきたからである。

現代人は方言に特別な価値を認め、その効果を経済活動や芸術・放送、地域興しといった社会生活のいろいろな分野に活用しようとしている。また、多様な地域文化の保存・活性化に必要だとして、教育の現場で方言継承の取り組みが行われるようにもなってきた。一方で、方言が地域間・世代間の意思疎通を阻害し、医療や介護の場でコミュニケーションギャップを生み出す原因となることも起こっている。

以上のように、方言は良きにつけ悪しきにつけ、現代社会にとって特別の意味を持つ存在となりつつある。方言の社会的あり方について考え、取り組まなければいけない課題が、一気に立ち現れてきたのである。しかしながら、それらの新しく多様な課題は、これまでの方言学では対応が難しい。なぜならば、新たな課題が必要としているのは実用的な視点であり、いかに社会に役立つかという研究姿勢だからである。その点、従来の方言学の関心は、いわば事実の追求に向けられ、社会にどう貢献できるかという視点が弱かった。

実用の視点に立ち、方言の社会的あり方に正面から向き合う学問は、まだ十分に育っていない。今や、現代社会に役立ち、現代人の生活を潤すような方言学が求められる。そのような方言学を、ここでは、「実践方言学」と呼ぶことにしよう。

「実践方言学」とは何か、簡単に定義すれば次のようになる。



BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

実践方言学とは、社会の中での方言の使われ方に注目し、その効果的運用について実践的に考える学問である。現代社会において方言が生み出す効用を追求するとともに、方言がもたらす問題の解決に取り組み、それによって現代人の生活の中で、方言を有効に機能させることを目的とする。

本講座は、こうした実践方言学の世界を総合的に紹介する初の試みである。新たな学問の必要性を説き、その方法や課題を解説しながら将来への展望を示したいと考える。

## 実践方言学の位置

方言学の中で、実践方言学の立ち位置はどうだろうか。記述方言学や地理方言学、歴史方言学、そして社会方言学といった、よく知られている研究分野が方言学の基礎部門であるとすれば、実践方言学はそれらの成果の上に立つ応用部門であると言えよう。その点では「応用方言学」と呼んでもよいかもしれない。基礎部門しかなかったこれまでの方言学の中に、それと対比するかたちで応用部門を置き、それを実践方言学と名乗ることにしたのである。

また、次のようにも言える。上でも指摘したように、従来の方言学は応用ということに必ずしも積極的ではなかった。応用は、経済や教育、医療といった、方言とは別の分野の仕事と考えてきた。しかし、方言学の応用である以上、それは経済学や教育学、医学の問題であると同時に、方言学の問題でもあるだろう。そうした他の分野との境界領域に属する課題を方言学の中に定位し、積極的に研究対象にしようというのが実践方言学なのである。

これまで、曖昧な位置に置かれていた研究に名称を与え、ひとつの学問として明確に認識することの意義は大きい。それまでばらばらに行われていた研究を総合的に把握することができる。ひとつのパラダイムの中で、個々の研究の位置付けがはっきりし、何が課題であるかが明確になる。孤軍奮闘していた研究者同士の交流が活性化し、連携が生まれる。知が結集し、共有さ



BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

れることで研究に推進力が備わる。実践方言学の誕生はそうした意義をもつはずである。

実践方言学の特徴としては、現場主義ということが挙げられる。実践方言学は社会に役立つことを目指す問題解決型の学問であるから、方言が使用される現場を重視する。経済や芸術、放送、行政、教育、医療などさまざまな分野とつながり、その活動を方言を通して支援する。研究者が積極的に現場に関与することで、有効なアイデアを出したり、役に立つアイテムを作ったり、ときには一緒にパフォーマンスを行ったりもする。これを研究者の側から見れば、実践方言学は市民参加型の方言学であるとも言えよう。このように現場を重視し、市民の活動と一体化しているところが実践方言学の大きな特徴である。

ただ、気をつけなければいけないのは、ともすると研究者が現場での活動に取り込まれ、研究が実践の中に埋没してしまうことである。問題解決を急ぐあまり、基礎的な方言学の知見が十分活かされなかったり、事例を報告するばかりで一般化に向けた検討がなされなかったりすることは避けなければいけない。それではとても有効な提言につなげることはできないであろう。これまでの方言学の基盤の上にしっかりと立ち、新たな学問としての理論と方法論の確立を目指す研究姿勢が求められる。

その意味でも、一度、研究の全体像を視覚化し、これまでの知見を整理しながら課題を把握することは必要であろう。この講座は、そうしたねらいを含んでいる。

## 実践方言学の背景

実践方言学の誕生について述べるには、現代社会における方言のあり方から説き起こす必要がある。方言にとって、現代はなによりも共通語化の時代である。共通語の普及と裏腹に方言の衰退が起こり、方言は劣勢な立場に追いやられつつある。その使用には世代的な偏りが生じ、上の世代と下の世代とでは方言による会話がしづらくなっている。また、人々の移動や通信が全国化、グローバル化する中で、地域の言語としての方言は円滑なコミュニ


BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

ケーションを阻害するものにもなってきている。

一方で、共通語化の進行は方言の機能に変化をもたらした。共通語が当たり前になることで、方言はむしろ特別な意味をもつ存在になってきた。フォーマルな場は共通語に任せ、方言はカジュアルな場をもっぱら受け持つようになった。そこでの方言は、話者たちの距離感を縮め、親しく会話するための心理的な装置としての役割を獲得した。今や方言は、人々の地域的アイデンティティを支え、地域の成員同士を結び合わせる絆として機能し、同時に、仲間内で会話や通信を楽しむコミュニケーションツールとしても活用されている。

このように、現代の方言には円滑なコミュニケーションを阻害するマイナスの側面と、逆に人々を心理的に潤し一体化するプラスの側面との2つの顔が備わることになった。実践方言学誕生の背景には、そうした方言自体の現代的変質がある。

また、そのような方言の変化により、現代社会が方言との向き合い方を変えてきたことも実践方言学の成立を後押しした。すなわち、民間では方言が商品経済や地域興しに積極的に利用され始めた。マスコミにおける方言の露出度がかつてなく顕著なものとなり、娯楽の世界でも方言の進出が目立ってきた。また、政府はそれまでの方針を大きく転換して方言の尊重を打ち出し、国語教育では方言に関する授業が取り入れられた。さらに、ユネスコが消滅の危機に瀕する言語の中に日本の複数の方言をリストアップし、文化庁がその保存・継承に乗り出した。

そして、忘れてはならないのが、2011年に発生した東日本大震災である。この未曽有の大災害は方言の衰退を加速し、救助・復興の現場では支援者と被災者とのコミュニケーションギャップが発生した。その一方で、地域の人々は方言を住民同士の心の絆と感じ、復興に向けての精神的な支えと考えるようになった。このように、東日本大震災は現代方言がもつプラス・マイナス両方の顔を浮かび上らせ、そこに実践的に関わろうという研究者を生み出した。続いて起こった熊本地震では、そうした災害に関わる研究者像がより鮮明になっていった。研究の世界では20世紀の終わりごろから、言葉の



BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

学問も社会福祉に貢献すべしという主張が起こり、方言関係ではいくつかの分野でその具体化が模索され始めていたが、こうした大災害は、皮肉にもその流れを加速することになった。2017 年にはそれらの活動を専門的に扱う「実践方言研究会」が設立された。

以上のように、実践方言学の誕生には、背景として現代社会における方言自体の変質がある。また、それに応じた社会情勢の変貌、自然災害の影響、学界の動きなどが大きく関わっている。本講座では、具体的事例を扱う中で、そうした背景を踏まえた論述がなされるはずである。

## 実践方言学の射程と、本講座の構成

実践方言学は社会に役立つ方言学を標榜する。方言のプラス面とマイナス面が顔を出すところに、実践方言学の出番が待ち構えている。この学問が向き合うべき課題は、社会のいたるところに見出せるはずである。

ここでは、それらの課題を大きく次の 3 つの柱に分類してみた。

(1) 豊かな社会生活のための方言学
(2) 地域文化の多様性を守るための方言学
(3) よりよきコミュニケーションのための方言学

(1) の「豊かな社会生活のための方言学」とは、私たちの社会生活をより魅力あるものにするために、方言を役立てようというものである。現代方言がもつ心理的機能を、経済活動や芸術・放送、地域興しなどに、いかに有効活用していくかを問うことになる。また、(2) の「地域文化の多様性を守るための方言学」とは、方言の衰退が著しい今日、多様な地域文化を育む方言をどのように保存し、継承していくかを課題とするものである。学校教育や市民団体などが取り組んでいる、方言を守り、伝える試みについて考える。最後に、(3) の「よりよきコミュニケーションのための方言学」とは、方言が引き起こす言語生活上の問題を解決しようというものである。高齢化や国際化、あるいは災害の発生など、現代人が直面するさまざまな状況の中で、


BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

方言コミュニケーションの改善に向けた方策などを検討するものである。

実践方言学が取り組むこれら（1）（2）（3）の課題に対応すべく、この講座では次のように３つの巻に分けて内容を構成している。

第１巻　社会の活性化と方言（半沢康・新井小枝子編）
第２巻　方言の教育と継承（大野眞男・杉本妙子編）
第３巻　人間を支える方言（小林隆・今村かほる編）

それぞれの巻が扱う具体的な課題については、このあと「各巻への招待」の中で紹介していくことにする。

実践方言学は産声を上げたばかりのまだ若い学問である。いろいろな人たちに関心をもってもらい、研究に参加していただくことで発展が期待できるはずである。そのひとつの礎の役目をこの講座が果たすことができれば望外の喜びである。

編集委員代表　小林　隆



BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

# 豊かな社会生活のために

## ―第１巻への招待―

### 本巻のねらい

かつて方言は恥ずかしいもの、忌避すべきもの、隠すべきものであった。家族や親しい友人との間で話すことは許されても、人前で口にすれば、密やかな嘲笑の洗礼を受けるものであった。しかしながら、いまや方言は社会のいたるところでおおっぴらにその姿をひとめにさらす。井上史雄『日本語の値段』（2000 年、大修館書店）が指摘するように、平成期以降、方言は日本人の娯楽の対象となり、社会のさまざまな場面で用いられるコンテンツのひとつとなった。もちろん、残念ながらそれは方言自体の生命力を反映するものではない。一部の有力な方言を除き、依然として方言は衰退の途にある。しかし、一方で、消滅の危機に瀕する方言は、日常の言語生活における活躍の場を狭めることと引き換えに、社会のさまざまな場面へと進出した。私たちが豊かな社会生活を送るのに欠かせない存在へと、方言は変身を遂げつつあるのである。

本巻ではこうした現代社会における方言の広がりを論じる。果たして方言は社会の活性化に寄与し、人々が豊かな生活を送るために役立つことができるのだろうか。社会生活のさまざまな側面へと拡大した方言活用の位置づけをあらためて確認し、その社会的な意味を検討することは実践方言学の重要な課題のひとつとなる。

「社会の活性化と方言」と題した第１巻は、私たちの社会生活をより豊かなものとするための方言の活用法を取り扱う。



BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

## 本巻の構成

本巻では、現代社会と方言とのかかわりについて、経済活動、地域・自治体、放送、芸術活動をキーワードに、それぞれの方言活用の事例を取り上げた。地域経済の主要な核となる観光業において、方言は「その土地ならでは」の雰囲気を醸し出す絶好のツールとなる。この方言の特性は、同時に地方自治体のさまざまな施策や地域興し、市民活動にも一役買う。一方で、こうした地域性から解放されたはずのインターネット空間においても、今、多数の方言コンテンツが見いだされる。さらにはヴァーチャルの空間のみならず、近年ではリアル世界の博物館等でも方言展示が企画され、人々の耳目を惹く。

テレビの世界では、バラエティ番組において古くから関西のタレントが活躍し、さらに近年は関西方言以外にも多様な方言が聞かれるようになった。また方言活用は、エンターテインメントにとどまらず、（ローカルの）報道番組にまでその範囲を広げた。映像芸術たるテレビドラマや舞台演劇など、フィクションの台詞回しにも方言が欠かせない。登場人物にどのような方言を話させるかは、キャラクター造形のキーポイントとなる。

こうした社会のさまざまな側面における方言の利用実態を視野に捉え、第1巻では12の具体的なテーマを設定した。執筆者とともに以下に各章のタイトルを紹介しよう。

【現代社会と方言】
第1章　地域経済のための方言活用（渡邉潤爾）
第2章　メッセージの中の方言活用（田中宣廣）
第3章　キャラデザインにおける方言活用（日高水穂）
第4章　IT社会の中の方言活用（中西太郎）
【芸術・放送と方言】
第5章　映像メディアにおける方言活用（田中ゆかり）
第6章　舞台芸術における方言活用（鳥谷善史）
第7章　バラエティ番組における方言活用（松本修）



BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第 8 章　放送番組における方言活用（塩田雄大）
第 9 章　博物館における方言活用（新井小枝子）
【地域づくりと方言】
第 10 章　方言を介した大学と自治体との協働（新井小枝子）
第 11 章　地方自治体による方言活用と地域づくり
（岸江信介・柚木脇大輔・鶴田健介・清水勇吉）
第 12 章　方言を活用した市民団体の取り組み（今村かほる）

## 本巻の内容

まず冒頭の 4 つの章では、私たちの社会生活の中に見られるさまざまな方言活用の事例を取り上げ、その現況と課題についての考究がなされている。

第 1 章「地域経済のための方言活用」は、観光産業における方言活用の事例を論じる。方言を他地域との差別化を図る「地域資源」と捉え、観光需要におけるサービスの一要素として方言を位置づける。需要と供給という経済学の理論的枠組みを踏まえ、東海地方を例に、方言の共通性をベースとした広域観光圏形成の可能性を示す。マーケティング理論の観点から「すき間市場」と位置づけられる方言は、単独の活用ではなく、他の観光財やサービスと組み合わせて供給されることでより効果的であることが指摘されている。

観光サービスにおける方言活用は、第 2 章「メッセージの中の方言活用」においても扱われている。第 2 章は、社会におけるさまざまな方言活用の分類を試みるが、それらは「商業的な利用」と「非営利的応用」に大別される。前者には、方言活用の代表例としてつとに指摘されてきた「方言みやげ・方言グッズ」に加え、地元方言を用いた観光客向けの歓迎の挨拶が含まれる。言うまでもなくその多くは観光需要によるものである。他方、東日本大震災時、同時多発的に各地で生じた東北方言による応援のメッセージは、第 3 巻のテーマと密接に関連する事象である。

第 3 章「キャラデザインにおける方言活用」は、方言を用いたキャラクター造形をテーマとする。方言の 2 次的（拡張的）使用のひとつに位置づけられる「方言キャラクターの創出」は、方言のイメージ喚起力を活用したも


BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

のとされる。第3章では、このうち「ご当地キャラクター」に焦点を当て、その分析を行っている。自治体主導で創設される「方言キャラ」は、自治体の外に対しては観光誘致、内に対しては地域アイデンティティの喚起を促す。こうした自治体の方言活用は、その地域社会に「地域志向性」が醸成されていることが前提となり、さらに「方言キャラ」の存在によって志向性が強化されるという双方向の影響関係が存在することを指摘する。

第4章では、現代社会に欠かせない存在となったインターネット上の方言活用を扱う。IT空間における方言活用の主体は、専門家たる研究者と一般の人々に分けられるが、後者の場合、SNS上のコミュニケーションでは、方言がネットスラングや若者ことばなどと同様に扱われ、「方言の脱地域化」が起きているという。一方で「方言翻訳」「情報集約サイト」「掲示板」「方言チャート」など、なお「方言の地域性」そのものを娯楽化した方言活用事例も多数紹介される。

第5章から第9章では、ドラマ、舞台、バラエティ、放送、展示における方言が、それぞれの場においてどのように活かされているかという観点から、具体的な事例にもとづいて解説する。

第5章「映像メディアにおける方言活用」は、NHKの大河ドラマを取りあげ、映像メディアを通じた創作のなかで、方言がどのように用いられてきたのかを論述したものである。現実の言語変種である方言およびその社会的な価値と、テレビ時代劇や歴史ドラマと呼ばれる創作の中での活用の仕方は、お互いに影響し合っている。現実の方言は、「ヴァーチャル方言」となって新たなステージに位置づけられ、ドラマで描き出される世界の「らしさ」というものを形づくっているという。

第6章「舞台芸術における方言活用」ではミュージカルや演劇における方言活用の実態を把握し、方言の機能、意義、使用の要因を論述する。特に、津軽方言による現代演劇や、関西方言による現代演劇を取りあげ、それぞれの目的と意義を論じている。方言活用によって、芝居の世界に観客をまきこみ、仮想の世界における共同体を産み出す役割を果たしているという。

第7章「バラエティ番組における方言活用」は、『探偵！ナイトスクープ』



BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

をはじめとする、いくつものバラエティ番組の制作者の立場からの論述である。番組での方言の取りあげ方を紹介し、番組作りにおける意識や方法を解説している。方言が活き活きとしている番組づくりを、豊富な事例によって紹介する。方言に対する敬意の姿勢を示しながらの番組づくりが、地方の豊かな個性や価値を認め合うことにつながり、さらには、日本人の豊かな生き方や価値観の創造につながるとする。

第8章「放送番組における方言活用」は、方言を使用した番組、すなわち、方言番組に焦点を当てて、その事例を紹介しながら、放送における方言の位置づけを論じたものである。「放送のことばは、原則として、共通語によるものとし、必要により方言を用いる」という、日本放送協会の国内番組基準を示し、方言番組に対する番組制作担当者やアナウンサーの意見、方言番組を視聴した人たちの捉え方を紹介している。正確な情報をより速く伝えることを使命としている報道は、本来的に方言との相性はよくないということを述べつつ、方言使用の場面を許容する「チャーミングなスタイル」があることを指摘している。

第9章「博物館における方言活用」は博物館などの社会教育施設で行われている方言の展示について、その事例を紹介し、方法と効果を論述したものである。方言を学ぶための展示、方言を利用して歴史や人物を紹介する展示、方言を芸術の一部としている展示を紹介している。方言研究の蓄積を、社会教育施設などでの展示に活かしていくための方法を見いだしていく必要性と、多様なテーマが潜んでいることを述べている。

最後に、第10章から第12章では、さまざまな組織や団体がてがけている地域づくりにおいて、方言がどのように活かされているかを、具体的な事例にもとづいて解説する。

第10章「方言を介した大学と自治体との協働」では、方言や方言研究の成果を介して、大学が自治体のかかえる課題に共に取り組んでいる活動、すなわち協働による取り組みが考察されている。具体的には、群馬県における過疎対策事業の事例を紹介している。大学と自治体による真の協働、活発な協働とするためには、工夫の余地がまだまだあり、地域振興を担う人材の育


BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

成を目指して継続、発展していきたいとの期待をこめる。

第 11 章「地方自治体による方言活用と地域づくり」は方言を活用した地方創生を目指している事例として、宮崎県小林市における「てなんど小林プロジェクト」の取り組みを紹介し、その効果や意義を論述したものである。方言研究者と小林市職員の共同執筆によって、方言活用の実態とその効果が、具体的かつ客観的に示されている。地域ごとにそなえている固有の特徴を、方言によって表現し、地域内外に宣伝し、その効果を最大限に発揮した事例であり、日本全国の地域づくりにおいて参考になる点がたくさんある。

第 12 章「方言を活用した市民団体の取り組み」は方言を介して組織された市民団体の活動の多様性を概観し、それらの市民団体相互の方言に関するネットワーク構築の意義、方法、課題について論じたものである。多様性については、方言を学ぶための市民活動と、方言を利用した市民活動に分類して紹介する。さらには、市民団体が個別にかかえる課題を整理して、ネットワーク構築の方法をさぐる。方言研究者の役割を指摘し、方言研究者としての実践も必要になってくることを述べる。

以上、本巻の内容を概観すると、現代の方言活用がきわめて多岐に渡ることがあらためて再認識されよう。いずれの章にも、気鋭の執筆者による最新データを用いた分析と今後に向けた有意義な提言が満載である。本巻が斯学の羅針盤となり、広範に活用されることを望む。

第 1 巻編者　半沢康・新井小枝子



BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

# 目　次

◇まえがき―新たな方言学の誕生― …… i
◇豊かな社会生活のために―第１巻への招待― …… vii

## 【現代社会と方言】

第１章　地域経済のための方言活用 …… 渡邉潤爾　3
第２章　メッセージの中の方言活用 …… 田中宣廣　27
第３章　キャラデザインにおける方言活用 …… 日高水穂　47
第４章　IT 社会の中の方言活用 …… 中西太郎　69

## 【芸術・放送と方言】

第５章　映像メディアにおける方言活用 …… 田中ゆかり　95
第６章　舞台芸術における方言活用 …… 鳥谷善史　117
第７章　バラエティ番組における方言活用 …… 松本　修　141
第８章　放送番組における方言活用 …… 塩田雄大　161
第９章　博物館における方言活用 …… 新井小枝子　183

## 【地域づくりと方言】

第 10 章　方言を介した大学と自治体との協働 …… 新井小枝子　207
第 11 章　地方自治体による方言活用と地域づくり
…… 岸江信介・柚木脇大輔・鶴田健介・清水勇吉　229
第 12 章　方言を活用した市民団体の取り組み …… 今村かほる　253

索　　引 …… 275
執筆者紹介 …… 279



BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

# 現代社会と方言

第１章

# 地域経済のための方言活用

渡邉潤爾

## 1.　はじめに

本章の目的は、地域コンテンツとして方言の経済的な活用の可能性を探ることである。方言の経済的活用の事例を探るとともに、経済学と経営学の理論から方言の位置づけを試みる。

近年、方言衰退傾向が大勢である一方で、方言みやげ、方言パフォーマンスなど「方言の商業的利用」が展開を見せている。方言は地理的・歴史的条件から形成されたもので、他地域とは異なる個性を示す「差別化」の要素であり、同時に地域の独自性に対して等身大の理解をうながす「地域資源」と考えられる。経済学の分野で Falck et al.（2012）は、ドイツの地域間交流が方言の共通性によって促進されることを膨大なデータの分析から論証した。これは方言という文化的つながりから交易の増加という経済的な効果がもたらされることを示している。さらに方言は各地域の個性を表すとともに、地域間交流ではぐくまれる共通性がある。この共通性に気づくことによって広い地域にまたがるような方言の活用を一般の人々にアピールすることが可能になると思われる。

本章では方言の経済的活用を分析するために、広い地域での方言間の共通点に着目して、広域の観光圏と方言の関係性を主に取り上げる。「広域観光」は「複数の市町村に跨る地域の観光振興の取組み」と定義される。国土交通省は沖縄県と奄美群島（鹿児島県）の方言など共通する伝統文化を基にした広域観光圏の形成を提言しており（内閣府沖縄総合事務局運輸部 2012）、そ



BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第 2 章

# メッセージの中の方言活用

田中宣廣

## 1.　方言の特殊な使用法

この章では、広告、看板、公共施設名などへの方言活用事例を考察する。

方言の使用法として特殊な部類なので、考察の前に、方言の基本的な性質2点を確認する。①1言語内の地域的変異（1地区で通用する言語体系）と②日常生活言語（普段の会話で話される言語）である。一般に①が先に想起されがちだが、方言研究では②の重要性も注意したい。

次に、課題内容の特殊性を本題の前に押さえる。広告、看板、公共施設名などへの方言活用は、方言の基本的性質の①を活かしつつ、②では基本から拡張されている。日常生活から離れたところでも使われるし、多くは書きことばで使われる。

この種の用法を筆者は「方言の拡張活用」と呼んでいる（田中 2016）。この用法は、普段の会話でも、話される言語でもないところから特殊とされる。方言の拡張活用の用法には、2節で説明するとおり7種類ある。そのうち、この章の課題の中核であって理解の土台となる「方言メッセージ」と呼ぶ用法から考察を始める。これらの用法の考察では、使用の意図や状況、すなわちどういう目的で、どういうところに方言が活用されているかを適切に把握しつつ理解することが必要である。



BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第３章

# キャラデザインにおける方言活用

日高水穂

## 1.　はじめに

現代日本社会において、方言の社会的な位置づけは大幅に変化した。かつて「地方」と「中央」の地域間格差の象徴として、地方出身者に「方言コンプレックス」を抱かせた「下位」の言語としての方言は、「上位」の言語である共通語が地域社会に浸透することにより、日常の生活言語としてはその使用場面を狭める一方である。

共通語の地域社会への浸透、すなわち地方生活者のなかに日常的に共通語を使いこなす世代が現れたことが、当該世代以降の伝統方言の継承の機会を失わせ、結果的に「方言コンプレックス」を解消することになったのは、皮肉なことではあるが、日本社会の現実である。

ただし、現時点ではまだ、地方生活者の日常生活がすべて共通語でまかなわれるようになっているわけではない。地域差・個人差はあるものの、親しい相手との私的な場面の会話では、方言（と話し手が認識している言語変種）の使用が維持されている場合が多い。

さらに、方言の社会的な位置づけという観点では、その二次的な使用も多様化を極めている。

表１は、現在の日本社会での方言の二次的使用のタイプを示したものである。現実世界における情報伝達のために、私たちが日常の生活言語として使用する方言を、方言の一次的使用と見なすとすると、それと一線を画す二次的使用として、①現実世界の私たちによる出身地以外の方言（ニセ方言）の



BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第 4 章

# IT 社会の中の方言活用

中西太郎

## 1.　はじめに

IT とは、Web サイトや e メール、SNS（ソーシャルネットワーキングサービス）など、インターネットやスマートフォンなどのコンピューター・インターネット・携帯電話などを使う、情報処理や通信に関する技術を総合的に指していう言葉である。1990 年代半ばから、全世界にインターネットが急速に広がり、以降、IT 技術の革新・普及が進んで社会全体に変化をもたらし、「IT 革命」という言葉が使われるようになって久しい。今や、IT 技術は我々の日常生活のあらゆる場面で欠かせないものになっている。それに伴い、方言のあり方も影響を受けている。

2000 年代の中ごろには、首都圏の若い女性を中心に、自分たちの生まれ育った地域と異なる地域の方言を、遊び感覚で携帯メールのメッセージに取り込む行動が流行(はや)り、「女子高生方言ブーム」を巻き起こした。女子高生向けの「方言本」が刊行され、首都圏の女子高生を中心にした若者が、そこから各地の方言を取り入れコミュニケーションに用いていた。こういった動きが方言にもたらしたのは、元々の土地との結びつきから解放された使用、「方言のおもちゃ化」（田中 2007）だった。その後、IT も進化・多様化し、それに伴い方言と IT の関わりのあり方も一層多種多様になってきた。そこで、本章では、方言と IT の関わり方の実態と課題について論じる。

一口に IT と方言の関わりといっても、その関わり方は様々である。本節では、その関わり方を整理する観点を洗い出す。



BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

# 芸術・放送と方言

第 5 章

# 映像メディアにおける方言活用

田中ゆかり

## 1. はじめに

本章では、映像メディアにおける方言活用事例として、テレビ時代劇・歴史ドラマを取り上げ、そこではどのようにヴァーチャル方言が用いられてきたのか、ということをみていく。

テレビドラマで用いられる「ドラマ方言」は、現実の言語変種に意図的な編集・加工が施された日本語社会における共有度・影響力の高い「ヴァーチャル方言」の一種である。そこで用いられる「ドラマ方言」が、どのような役割で取捨選択されるのかといったことから、時々における言語ステレオタイプや価値・認識を読み取ることが可能である。

テレビドラマは、その大衆的な影響力の全盛期は過ぎたとされるものの、言語ステレオタイプやそこで用いられる言語変種（とその背景）に対する価値や認識をよく反映すると同時に、それらの拡散装置でもある（田中 2016: 113–127）。

また、テレビドラマは、時代設定によって大きく現代劇と時代劇・歴史ドラマに分類でき、両者における「らしさ」を構築する仮想言語の構造、とくに仮想世界の基層を形づくるベース言語が大きく異なる。

現代劇ドラマは主に現代語がそこに投影されるヴァーチャル言語の資源となるのに対し、時代劇・歴史ドラマは現代ではない過去のいつかであるということがその前提となるために、舞台となる時代を喚起させる仮想の時代語がそのベース言語となる。前者は仮想世界を構築するベース言語が現代語で



BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第 6 章

# 舞台芸術における方言活用

鳥谷善史

## 1.　舞台芸術とは

本章における舞台芸術とは、落語や漫才、ミュージカル、演劇といった劇場における舞台空間を活用した公演活動のことであり、舞台空間という一つの場で芸術活動を行うことである。それぞれの方言活用の意義や目的とその要因について述べたいのであるが、まず、これらは大きく二つのグループに分けることが可能であろう。一つは、落語、漫才といったお笑いで伝統芸能と認識されているもの。もう一つはミュージカル、演劇といった芸術として認識されるものである。本章では、特に後者の芸術として認識されるミュージカル、演劇に的を絞って方言活用の実態から、その機能や意義及び使用される要因について考えたい。

## 2.　ミュージカルにおける方言活用

ミュージカルで方言を活用する例は少ないのではないかと予想した。それは、その中心が歌曲であるため、地の文（台詞）においては、優先的に標準語やそれに準じるものが用いられるであろうと考えたからである。しかし、田中（2015a、2015b、2016）の研究が指摘するように、比較的多くの人が知っている人気の高いミュージカルで、方言活用がみられる。田中（2015b）においては、「宝塚歌劇」における方言活用とその機能を解説している。また、同じく、田中（2015a、2016）や同氏が研究社 Web マガジンに寄稿され



BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第 7 章

# バラエティ番組における方言活用

松本　修

## 1.　はじめに

朝日放送テレビのバラエティ番組『探偵！ナイトスクープ』の事例を基本として論を展開してゆきたい。この番組は、1988 年 3 月 5 日に放送を開始し、2020 年 7 月時点で、33 年目に入っている現在もなお、CS 放送も含め、全国 33 局で放送中である。視聴者からの依頼に基づいて、あらゆる謎を解明し、また夢を実現してもらおうとする視聴者参加番組である。

筆者はこの番組の企画者であると共に、当初から現在に至るまで、一貫してプロデューサーを務めている。放送でのクレジットは、「プロデューサー」「チーフプロデューサー」「制作」「企画」などと変化はしてきているが、企画当初から変わることなく、この番組に関わっている。

さて筆者はまた、大阪の放送局・朝日放送に 1972 年に 22 歳で入社して以来、70 歳の現在もなお 48 年以上、大阪のスタジオで、バラエティ番組を作り続けてきた。東京に出向いて東京のスタジオで、並行して番組制作に携わることも少なからずあったが（『大改造‼劇的ビフォーアフター』など）、基本の仕事場はあくまでも大阪であった。その大阪のテレビバラエティ番組で会話される言語は、筆者が入社する以前から今に至るまで関西方言が中心となっている。同時にこれは重要なことだが、『おはよう朝日です』などの情報ワイド番組でも、関西方言をしゃべれるアナウンサーは、あえて京阪式アクセントで自由に方言を喋るのが通例である。

こうした民放 65 年ほどの歴史が、関西人に自分の言語に対する自信や誇



BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第 8 章

# 放送番組における方言活用

塩田雄大

## 1.　はじめに

この章では、放送番組における方言の活用を中心に考えてゆく。新聞での方言の扱いについてはここでは取り上げないが、例えば加藤（1962）、日高（1986）、田中（2011）、塩田（2016）などで考察されていることを付記しておく。インターネットニュースでの方言について取り扱った本格的な論考は、まだ見当たらない。また各地のローカル情報番組での方言使用の実態については、西尾（2009）で詳しく分析されている。

なお、「方言番組」は「①方言による番組（方言使用番組・「ツールとしての方言」番組）」と、「②方言についての番組（方言題材番組・「ネタとしての方言」番組）」に分けることができる（塩田 1999.11a、b）。この章では、「①方言による番組」に焦点を当てて考える。

## 2.　方言を活用している実例

まず、放送に方言を活用している例の数は、テレビよりもラジオのほうが圧倒的に多いことがわかっている（日高 1986、塩田 1999.11b、1999.12）。ここでは、ラジオでの代表的な実例を、報道に関連するものを中心としていくつか紹介する。



BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第 9 章

# 博物館における方言活用

新井小枝子

## 1.　はじめに

方言は音声言語である。また、日常であり、生活のことばである。このような方言が、博物館などの社会教育施設をはじめ、多種多様な施設や空間で展示されることがある。この章では、タイトルにある博物館を、あらゆる展示空間として広く捉え、そういった場所に方言が登場する事例を整理してみたい。展示の場所を限定せずに、展示という行為あるいは活動がなされる際の方言の扱われ方を調査し、展示物としてのそれと、展示物に付随して用いられるそれとに分類する。この分類にしたがって、展示における方言の位置づけを考察する。展示の場に方言が登場するとき、どのような方法によっているか、どのような効果を生み出しているかを明らかにすることになろう。

なお、博物館では、展示以外にも方言活用の事例がある。例えば、石川県金沢市に、市内の文化施設に誘うためのキャッチフレーズ「金沢よるまっし」がある。方言形（下線部）を用いて、観光ガイドブックや専用サイトを作成し、博物館をはじめとする文化施設へと案内している。このような事例は本章では扱わず、展示とは区別して考えたい。

## 2.　方言を展示するということ

言語を常設展示する博物館としてまず思い浮かぶのは、国立民族博物館（大阪府茨木市）である。「言語展示学」を論ずる菊澤（2018a、2018b）によ



BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

# 地域づくりと方言

第 10 章

# 方言を介した大学と自治体との協働

新井小枝子

## 1.　はじめに

私たちの生活の基盤がおかれている自治体は、多種多様な課題と向き合い、その解決の道を探りながら日々を過ごしている。毎日の生活を、そして、未来の生活をより良いものとするための課題はさまざまであり、日常生活の基盤となる衣食住に関するものはもちろん、健康、仕事、教育、交通、災害に関するものなど多岐にわたる。それらの課題に対し、過疎対策、医療対策、環境対策、防災対策など、これもまた多種多様な対策が講じられている。

大学では、方言学に限らず、文系、理系のあらゆる学問分野の研究を通じて、学生の教育が行われている。大学の役割の一つとして、地域貢献がより意識的に明示されるようになって久しい。大学での教育研究活動を社会に開くという観点から、研究成果の公開をはじめとして、工夫をこらした地域貢献活動がなされている。

この章では、方言や方言研究の成果を介して、大学が自治体のかかえる課題に共に取り組んでいる活動、すなわち協働による取り組みを考察する。筆者が行っている群馬県吾妻郡中之条町六合地域での活動を紹介し、方言を介した大学の貢献のあり方や、それを見すえた方言研究のあり方を考える。

## 2.　自治体がかかえる課題と大学の地域貢献

近年、多くの自治体がかかえる課題の中に、超少子高齢化や過疎化があ



BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第 11 章

# 地方自治体による方言活用と地域づくり

岸江信介・柚木脇大輔・鶴田健介・清水勇吉

## 1.　消滅の危機に瀕するまち

現代の日本において、いわゆる「大都市圏」と「地方」という対立が存在するとすれば、相対的に地方の立場は弱いといわざるを得ない。その土地土地の人口動態や経済活動などの状況から今後、どのような将来が待っているのか、予想するのはさほど難しいことではない。自治体の基本である住民、その人口が減少傾向にあるのはいまや全国各地どこでもみられる現象である。90 年代初頭から人口減少に歯止めがかからず、人口の 50% 以上が 65 歳以上の高齢者で、社会的・経済的にコミュニティーを維持できなくなりつつある集落の発生や増加が懸念されている。

次ページの表 1 の転出率の高いところは、総じて地方の町村である。人口減少は経済や物流にもダメージを与え、人もおらず経済も回らず物もないとなれば人を留めておくだけの魅力はなくなり、人口流出にさらに拍車をかけるといった負の流れができてしまうことになる。なんらかの策を講じなければその先には消滅という二字しか見えてこない。



BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第 12 章

# 方言を活用した市民団体の取り組み

今村かほる

## 1. はじめに

明治以来、近代国家を目指す我が国において、全国に通用することばとしての標準語を求める一方で、各地域のことばである方言は、標準語を身につけるために矯正すべきもの、撲滅すべきものと位置づけられた。戦後、教育や特にテレビ放送を通じて共通語が普及し、1975 年以降には全国的に広まった（今村 2005）。そうした歴史の中で、1970 年代末くらいまでは方言を低く見る考え方が残っており、現在でも方言に対してコンプレックスを持つ世代もまだある。1980 年代以降は、「地方の時代」や「個性の時代」となり、方言を地域アイデンティティー（独自性）の象徴と位置づけたり、地域振興の資源として注目したりしたことで、方言の価値が見直された。さらに近年は「方言活用の時代」となったことが、2018 年の「分かり合うための言語コミュニケーション（報告）」において指摘されている。

そのような中、方言を積極的に活用し、次世代に向けて地域の伝統文化を継承しようとする活動や、方言を介して社会貢献を目指す活動、方言を学ぶ生涯学習活動など、さまざまな活動を行う市民団体が存在する。

この章では、まず、方言の担い手である市民が、どのような組織を作り、方言を介してどのような活動を行っているのか、その多様性について概観する。それに続き、そこから見えてくる課題について述べる。さらに実践方言学の立場から、多種多様な市民団体の間で、方言に関するネットワークを構築する意義やその方法、課題について考える。



BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers